

はじめに

本編で扱う時代は、明治時代から太平洋戦争の終結までである。厳密には、近代という時代区分による始期と明治時代の始期は一致しない。明治時代は明治天皇の即位期間（一八六七～一九一二年）とほぼ一致するが、近代の始まりは、開国という視点から嘉永六年（一八五三）のペリー来航以降とされている。明治維新の始期が、同じくペリー来航、あるいは安政五～六年（一八五八～五九）の五ヶ国通商条約締結・開港に設定されることと関連しているといえる。ちなみに、明治維新の終期は複雑で、①明治四年（一八七一）の廃藩置県、②同十年（一八七七）の西南戦争の終結、③同十二年の琉球処分、④明治十四年の政変、⑤同十七年の秩父事件、⑥同十八年の内閣制度の発足、⑦同二十二年の大日本帝国憲法発布、⑧同二十三年の第一次帝国議会開設など多岐に渡っている。明治維新の終期説がここまで多様なのは、政治・経済・軍事・社会・文化に対して、あらゆる変革をもたらしたのが明治維新であり、そのあらゆる視点からの終期設定が可能だからであろう。そして、諸改革を推進するために必要であったのが、多種多様な政策であり、その政策が地方にどのような影響をもたらしたのかを明らかにしていくのが地方史の役割といえる。

本編において、その諸政策が三股地域にどのような影響をもたらしたかを紹介したいが、三股独自の史料は不足しており、詳細は明らかにできなかった。しかし、三股が明治維新を主導した西南雄藩の一つである鹿児島藩に江戸時代を通して属していたことを考慮すると、幕末から明治における諸政策は三股にも大きな影響を与えたはずである。

本編は時代を追うのではなく、大きく「政治」「産業」「教育」「戦争」という四つの章を設けて記述した。各章は密接な関係にあるため、内容に重複を免れなかった点をご容赦願いたい。

第一章は政治・行政面を中心に、慶応三年（一八六七）の大政奉還と王政復古から記述を始め、昭和初期までを扱った。残念ながら新史料の発掘に乏しく、明治初期の三島地頭による山王原開拓、都城県政における三股の様子、西南戦争と三股の関係、町村制施行による三股村の誕生については、『町史 改訂版』の内容を超えることはできなかった。また、明治後期からは日本全体が戦争に突入していくことを受けて、特に昭和初期以降は第四章に詳細を譲った。

第二章は産業面に重点を置き、産業の発達に交通網の整備が欠かせないという観点から交通史も併せて記述した。大正三年（一九一四）に開通した三股駅の誕生が三股地域にどのような恩恵をもたらしたのかという点も見逃せない。三股地域の主たる産業を占める稲作については、その発展に不可欠であった水利事業の歴史も紹介した。また、明治政府が推進した養蚕業の発達史を紐解き、宮崎県の養蚕の中心地となった北諸県郡についても触れた。そして、三股地域の畜産業がどのような歴史をたどったかは、第五編現代の第二章へつながる伏線となっている。本章の特記事項としては、「松山家文書」の発見・紹介が挙げられる。今後は同史料を史料編として刊行し、本町の明治時代の歴史解明の一助とすることが重要な課題である。

第三章は教育面に重点を置き、文教の町として三股地域がどのように教育行政に取り組んできたかを詳述した。近代の教育行政が国の施策を受けて実施される点は現代と変わらないが、教育の重要性が時代を追うごとに増し、先に紹介した「松山家文書」にも触れながら三股の教育史をたどれる内容となっている。ただ、第四章でみられるとおり、近代という時期の教育は戦争に翻弄された時代でもあった。第四章の特記事項は「都城東飛行場跡」が挙げられるであろう。

本編の編さんに臨み、『宮崎県史』『都城市史』が既に刊行されており、それらを利用できたことは『町史 改訂版』が刊行された時期とは異なり、史料環境が大きく改善されていることを付記しておく。